

観光フォーラム

中部・南部フランスと周辺地域のツーリズム・ノート

—魅力と特色を求めて—

Tourism Notes on the Destinations in Middle and South France as well as in the Neighborhood

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学客員教授、名誉教授

I. まえがき

1. はじめの言葉

本稿は、ボルドー (Bordeaux)、マルセイユ (Marseille)、ニース (Nice) など中部および南部フランスの諸都市と、隣接するイタリアのミラノ (Milano)、近くのスイス・アルプス、ユングフラウ (Jungfrau) などについて、筆者が見聞したところを中心に、感じたことを提示し、大方の参考に供するものである。

フランスの中心は、パリ (Paris) であるが、パリ並びに (パリの東西方向にある) モン・サン・ミッシェル (Mont Saint Michel) とシヤモニ=モン・ブラン (Chamonix=Mont Blanc) については、前稿 (大橋, 2024) で記述している。それを見ていただきたい。本稿は、それと一体のものである。ただし、フランスの鉄道とホテルの事情については、本稿にも強く関連するので、その概略部分を以下で再録している。

ところで、本稿で主として対象としている中部・南部フランスについては、例えばカンヌ (Cannes) のように有名な映画祭、すなわち“カンヌ国際映画祭”でよく知られた所があるばかりか、2023 (令和5) 年には、ラグビーのワールド・カップ大会がトゥールーズ (Toulouse) やニースなどで行われ、改めて広く知られるものになった。

その中でも、歴史上、注目される大きな出来事には、なんといっても、14世紀、1309~1377年の間 (ローマ) 教皇庁が (本稿で取り上げるこの地域の) アヴィニオン (Avignon) にあったことが挙げられる。これは「教皇のアヴィニオン捕囚」といわれる事件で、直接的には、時のフランス国王、フィリップ四世と教皇、ボニファティス八世とが聖職者に対する課税問題などで対立したことに端を発し、次の (フランス出身の) 教皇、クレメンス五世以降約70年間、教皇庁がアヴィニオンに置かれていたものである。

この事件の意味するところについては、目下、世界的に種々論議があるが、ツーリズム上では、後述のように、現在のアヴィニオンには当時の教皇庁の立派な建物が残っており、大きな

ツーリズム・ポイントとなっていることは看過できないことである。

こうしたイタリアとこの地域との関連をみると、この地域には古代ローマ帝国時代の遺跡が多く残っていることが注目される。例えば、アヴィニオンに近いアルル (Arles) とニーム (Nîmes) には、現在のローマに残っているのと同様な、古代ローマ帝国時代の巨大なコロッセオ (colosseo: 円型闘技場) があるし、さらに近くにはローマ帝国時代に建設された有名な巨大な水道橋、ポン・デュ・ガール (Pont du Gard) もある。これらを見ると、古代ローマ帝国時代には、少なくともこの地帯は、実際上でもローマ帝国の有力な一部であったとみることができる。

ところが現在では、列車でフランスから国境を越え、イタリア領に入ると、沿線の民家風景は、後述のようにかなり変化する。端的にいえば、両国の生活文化の違いのようなものが強く感じられる。この違いは、どこから来る (来た) ものか。そのような思いを持ちつつ、本稿では、フランスからイタリアへの移動記を提示している。

そして最後に、アルプスの凄さ、それがツーリズム上でどのように生かされているかを紹介するために、スイスのユングフラウを訪れる。

なお本稿は、筆者が1992年以来数回にわたり調査研究のため西ヨーロッパに滞在した際における見聞に基づくものである。その他の近年の資料等により十分に補完しているが、現状についてはインターネット等で確認されたい。

まず、フランスの鉄道とホテルの事情について、ごく一般的にまえがき的に概見する。

2. フランスの鉄道

フランスの鉄道で中心をなすものは、(日本のJRに相当の) いわゆる国鉄で、フランスではSNCF (Société National des Chemins de Fer Français: フランス国有鉄道公社) という。SNCFには、日本の新幹線列車に相当するTGV (Train à Grande Vitesse: 高速列車) と在来線とがあるが、TGVと在来線とは、日本の場合と異なっ

て、線路幅が同じ、つまり共に、国際標準規格（1435mm、いわゆる広軌）であるため、乗降ホームや駅舎などが同じものになっている所が多い（ただしフランス、アヴィニョンのように、例外的に在来線駅とTGV駅とが別の場所で別の駅になっているものがある。こうした場合には両駅の間でバス便がある）。

すなわちフランスでは、（新幹線的な）TGVは、原則として、在来線と同じ駅の同じホームから発車する。そしてTGVは、TGV専用の線路のある所でのみ、在来線と別れて、その上を走行し、次のTGV停車駅の前で在来線と合流し、在来線と同じホームに着く（在来線と同じ線路を走る区間もある）。

TGVは、もともと各地方の中心的大都市の間を結ぶもので、そうした大都市の駅にのみに停車するものであるため、TGV専用線路の区間は一般にかなり長い。従って所要時間短縮に役立っているところは大きい。日本の新幹線列車と同様な役割を充分果たしている。他方、TGVも在来線も共用の駅では、例えば列車の発着時刻表を見ると、在来線列車もTGVも区別なく併記され、注欄でTGVと記載されているだけである。

ただしTGV乗車は、原則として、すべて座席予約制で、事前の予約が必要である。すなわち原則としては、自由席、立ち席はない、ということである。予約の際、ユーレイルパスのようなパス乗車券所有の場合でも、低額の予約手数料が必要な場合がある。

なお、SNCFのパリにおける主要駅には、以下のように6つのものがある。例えば東京駅や大阪駅のように、パリを（形の上にしる）代表する1つの中央駅（例えばパリ駅）というようなのはない。6つの駅はすべて、地方行き路線の終点・始発の駅となっているものである。ただし、行き先が駅により異なる。その所在地と行き先路線の概要は、以下の通りである。

- ①サン・ラザール駅（Gare Saint Lazare）：パリの北西にある。フランスの北西地方方面行きの駅。
- ②北駅（Gare du Nord）：パリの北部、次の東駅の近くにある。フランス北部方面、およびベルギー、オランダ、ドイツ北部方面行きの駅。
- ③東駅（Gare de l'Est）：パリの東部、北駅のやや南東にある。フランス東部方面、ドイツ南部方面、スイス、オーストリア方面行きの駅。
- ④リヨン駅（Gare de Lyon）：パリの東側、セヌ川の北側にある。フランス南部方面、マルセイユやニース方面行きの駅。
- ⑤オステルリッツ駅（Gare d'Austerlitz）：リヨン駅の南部、セヌ川の南側にある。スペインやポルトガル方面行きの駅。
- ⑥モンパルナス駅（Gare Montparnasse）：パリ市内のやや南部にある。トゥール（Tours）やボルドーなどフランス南西部方面行きの駅。

3. フランスのホテル

フランスでは、原則として、ホテルの設備の良し悪しのいかんは、その程度を星の数で表わし、店頭に掲示することになっ

ている。星の数が多いほど優等である（最高は5つ星。ただしフランスでも実際には“星なし”のものが結構ある）。

しかしこれは、根本的には、あくまでも設備の状況の程度を示すものであって、宿泊の快適さそのもの（かなりの程度宿泊者の主観に依存する）を意味するものではない。ごく一般的には、星2つのもので日本のいわゆるビジネスホテル級の程度といわれる。

この場合宿泊料金は、確かに星の数に応じて高低のあるものが多い。しかし星の数と直結したものでは必ずしもない。宿泊料金は、フランスでは、とにかく店頭で掲示することになっている。その場合、宿泊料金がよくわかるよう、例えば店頭で大書してあるものもあれば、よく探さないといけないようなものもある。

料金は、多くの場合、（日本と同様）宿泊者一人あたりの料金で（ドイツ等では原則として一室あたりの料金）、宿泊翌朝の朝食代は別料金の場合が多い（例外的に翌朝の食事代付きの場合もある。ドイツ等では原則として朝食代込み）。

また、フランスでも、少数ながら、鉄道駅の構内や近くにある市内観光案内所（通常、ツーリスト・インフォメーションという）でホテルの予約をしてくれる所がある（例えばパリのいくつかの駅）。しかし本稿筆者の知るところ、フランスではイギリスやドイツのように全国的に広く充実しているとはいえない。

本稿では、まず、フランス中部の要衝、トゥールを訪ねる。トゥールは、パリから列車で行く場合、パリ・モンパルナス駅が出発駅で、同駅からTGVで約70分である。同市は、大西洋に注ぐロワール（Loire）川の流域にある中心的大都市であるが、何よりもロワール川流域に多くの古城のあることで知られている。こうした古城は、往時の最盛期には300を数え、現在でも80ほどが残っているといわれる。

II. トゥールとロワール川流域の古城

トゥール駅は、駅舎がかなり立派なもので、何か威厳を感じる。トゥールは単なる一地方都市ではない。古城街の中心地である、といった威厳のようなものである。駅のすぐ近くには、（パリのシャンゼリゼ通りを小型化したような）ベロンガー（Béronger）通りが走っている。その北西には旧市街地の中心、ブルムロー（Plumereau）広場などがある。

ロワール川流域にある古城のうち、現存するものの中で、種々な資料によると、とりわけ名城として名高いベスト12的なものには、ロワール川の上流からみてゆくと、次のようなものがある。

シャンボール（Chambord）城、ブロワ（Blois）城、シュヴェルニー（Cheverny）城、アンボワーズ（Amboise）城、シュノンソー（Chenonceau）城、ロッシュ（Roches）城、ヴィランドリ（Villandry）城、ランジェ（Langeais）城、アゼー・ル・リドー（Azay-le-Rideau）城、ユッセ（Ussé）城、シノン（Chinon）城、ソムール（Saumur）城。

トゥールからは、これらの城めぐりのための種々な観光バスが出ている。中には、例えば1日（8時間ぐらい）にこれらの城の

2つないし3つをゆっくりと回る観光バスの自動車（例えば運転士とガイド付きの大型ワゴン車のもの）もある。これらのバスについては、ホテルのフロントないしトゥール駅内の市内観光案内所に案内パンフレットがあり、申し込みを受け付けてくれる。

ここでは、中でも代表的なものとして評判の高いシャンボール城とシュノンソー城についてのみ、本稿筆者の感じたところを紹介しておきたい。

まず、シャンボール城は、この渓谷の一番奥にあることもあって、広大な森の中に忽然と建っており、日本人には森という海の中の龍宮城といった感じがする。この城は、16世紀に時のフランス皇帝、フランソワ一世のために作られたもので、同一世の寝室や、太陽王といわれたルイ十四世の寝室などが残されている。

構造的には何よりも、城内の中心にある主階段が二重のらせん式となっており、上りと下りの階段が平行して別々になっていることで有名である。この二重階段こそは、この城観光で最大のポイントになっている。ちなみに、この城の設計にはレオナルド・ダ・ヴィンチも加わっていたといわれるが、この階段も彼の設計によるものであろうか。

次に、シュノンソー城は、トゥールに近く、(ロワール川の支流) シェール川 (Selles) の上にアーチ型の橋脚で川を横断するように建てられた特異な形の美しい城である。城の入口の川辺には、美しいというよりは豪華な花壇の庭園が2つもある。この城は、もともとはシェール川に作られていた製粉所が出発点になったもので、1430年代に城として完成された。その後1650年にはルイ十四世が訪れたことがある由緒あるものである。

もともこの城は、もともと女王や王女の所有物であった時期が長く、「女性の城」といわれ、内部の造作などにはそうした雰囲気が強く感じられる。城というよりは、豪華な別宮という雰囲気である。論者によると、フランスでは、ベルサイユ (Versailles) 宮殿に次いで観光客が多い城といわれる。

トゥールは以上とし、次に、フランス中部のやや南方、大西洋に近い著名な都市、ボルドーに向かう。ボルドーには、パリ、モンパルナス駅から直通のTGVが出ており、約3時間で着く。トゥールからでは、ごく近くのサン・ピエール・デ・コル (St. Pierre des Corps) でそれに乗り換え乗車できる。サン・ピエール・デ・コルからボルドー中央駅 (サン・ジャン (St. Jean) 駅) までTGVで約2時間である。

Ⅲ. ボルドーとワイナリー

1. ボルドー概観

ボルドー中央駅、すなわちサン・ジャン駅は、市内地理的には、市の南部にあり、市街中心部からやや離れた所にある。例えば市のシンボリックな広場といっているカンコンス広場 (Esplanade des Quinconces) は、サン・ジャン駅の北方約3kmの所にある。もともとサン・ジャン駅から同広場まで、2004年トラムが開通している。

カンコンス広場は、同市の今1つのシンボルといえるガロンヌ (Garonne) 川に面しているが、この広場はとにかく広い。12万㎡もある。広場としてはヨーロッパ随一といわれる。広場の入口には、1789年のフランス革命の際活躍したジロンド派 (Girondins) の人々に対する大きな顕彰碑が建っている。同派のリーダーにはボルドーや近辺、つまりジロンド県出身者が多く、こうよばれたものである。その一方、ガロンヌ川の岸辺には2006年まで、防空巡洋艦コルベール (Colbert) 号が博物館船として係留されていた。

この広場から南方 (サン・ジャン駅方面) に向かって、市の中心通りといっているいいセント・カトリーヌ通り (Rue Sainte-Catherine) が出ている。人道部分だけの、日本でいえば大阪の心斎橋筋のようなものであるが、それを南方へ少し行くと、小さな広場があって、右手に大劇場がある。さらに500mほど行くと、左側に大きな教会が見える。これは、ボルドーの著名なサン・タンドレ大聖堂 (Cathédrale Saint-André) で、ジョルダンの有名な(処刑台におけるキリストの真の姿に迫らんとする)「キリスト」の絵などがある。その全霊的迫力にはキリスト教徒ならずとも圧倒される。

ちなみに、西欧のカトリック教会や美術館などでは、宗教的絵画としてキリスト教の歴史やキリストの受難を主題にしたものが多く展示されているが、それらは主題的な点で、本稿筆者のみるところ、日本の(仏教寺院などにおける)宗教的絵画と根本的に異なるところがある。日本のそれらでは、花鳥山水を旨とし、何よりも穏やかな場面を主題にしたものが圧倒的に多いが、西欧のそれでは「血なまぐさい」ところをそのまま、しかもできる限り凄惨に描いた(と思われる)ものが実に多い。

これは根本的には、キリストの生涯がそのようなものであったためであろうが、例えば新約聖書に出てくる有名ないわゆる「洗礼者ヨハネの処刑」の斬首の場面などについても、それを描いた絵が美術館などには多くあり、しかもその中には血のしたたる場面をそのまま描いたものがある。

要するに西欧絵画では、自然の、なにかんずく人間の、本質的な怖しさ・恐さ・凄惨な面をできる限りリアルに描こうとするものが多いのに対し、日本のそれでは(人間を含めた)自然の(創造上のものを含め、あるべき)美しさを現そうとしているものが多い。西欧文化と日本文化との根源的な違いを見る思いがする。

ボルドー市内のセント・カトリーヌ通りに戻って、さらに南向きに1kmほど行くと広場があって、有名なアキテーヌ門 (Porte d'Aquitaine) がある。そこからさらにヴ・ラ・マルヌ通り (Cours de la Marne) を800mほど行くと、サン・ジャン駅に着く。

2. ワイナリー概観

ボルドーは、なんといっても、フランス産ワインの生産地帯の中心として世界的に名高い。ボルドーからそのワイナリー (フランスではシャトー (Château: 直訳的には「城」) という) 巡りの観光バスがいくつか出ている。市の観光案内所にはその資料があり、申し込みができる。ここでは、2つのシャトーの場合を紹介して

おきたい。

その1つはシャトー・タイヤック (Château Tayac) の場合である。まずびっくりさせられるのは、そのワイナリー所有・経営者の住まい等をなしている建物 (本館) の立派なこと、豪華なことである。コンクリート製3階建ての、実に堂々たる、まさに城 (本丸) というべきものである。それが葡萄畑の中に聳え立っている。それは Château とよぶしかないものと改めて感じ入った。もとよりその本館の前には広い広場、駐車場などがあり、醸造工場施設、ワイン樽の保管庫、顧客接待用の販売施設などが並んでいる。工場というよりは城域である (ただしここでは塀はない)。

今1つは、シャトー・ブランダ (Château de Branda) の場合で、ここでは堂々たる本館や付属の各種施設が青々とした芝生に取り囲まれた一角を成しており、しかもそれが、高さ3mほどの (城壁というべき) 塀に取り囲まれている。まさに、というよりは、全く、城であり、城郭というほかはない。このいわゆる城壁の外には葡萄畑が延々と広がっている。広々とした葡萄畑の中において立派な塀に囲まれた Château の偉容は、一見に値する。

ボルドーは以上とし、次に、フランス南部のトゥールーズに向かう。ここは近くに、宗教都市としてはフランス随一といっているルールド (Lourdes)、城郭都市としてヨーロッパで最高といわれるカルカソンヌ (Carcassonne)、大聖堂のあるアルビ (Albi) などがある。ボルドーからトゥールーズまで直通 TGV で約2時間である。

IV. トゥールーズと近郊

1. トゥールーズ

トゥールーズは、ヨーロッパ主要諸国共同出資の航空機製造会社「エアバス」の本社があることで有名であるが、何よりも南フランスの巡礼活動の拠点としても知られている。それは、端的には、次に述べるルールドに代表されるものであるが、トゥールーズ市内にあるものとしては、サン・スルナン聖堂 (Basilique St. Sernin) がある。これは、トゥールーズ駅前の通り (Rue de Bayard) をしばらく行って、北西方向に高い塔が見えてくるものである。この塔が実に印象深い。

同聖堂境内から出ているトゥール通り (Rue de Tour) を南の方に200mほど行くと、キャピトル広場 (Pl. Capitole) があり、市役所の建物がある。その2階ホールは見事な装飾に彩られているもので、市の賓客の歓迎式場や市民結婚式場等になっている。見学できる。

2. ルールド

ルールドは、トゥールーズのおおよそ南方、普通列車で2時間ほどの所にある。ここは1858年に、母の病気の看病に尽くしていた地元の少女の枕元に聖母マリアが現れ、近くの洞窟のある所に行くと泉がある。その水で母者の病気は治るといってお告げがあった。その通りそこに行くと泉から水が湧き出て、母者の病気が快癒したという言い伝えに基づく。

現在では、それは“奇跡の泉 (洞窟)” (La Grotte Miraculeuse) とよばれ、そのすぐ上にはマリア像が置かれ、今も水を汲む人が絶えない。特別な水汲み施設も設けられている。付近には蠟燭奉納所の通りがあり、(簡単な覆いの) 屋根の下に大小様々な蠟燭が、実に多く立てられている。中には太さ40cm、高さ2mほどのものもある。かたわらに清流が流れている。日本、伊勢神宮 (内宮) 参道の五十鈴川畔を彷彿させる。

洞窟の上部にはシュベリウール寺院 (Basilique Supérieure) が建てられており、隣接して他の教会や顕彰碑のある聖なる広場などもあり、今やカトリック関係者ではローマ教皇庁と並ぶ一大聖地となっている。実に多くの人が水汲みや巡礼として訪れる。通常でもバスを借り切ってグループで来る人が多いが、例大祭の時などは、ヨーロッパ各地から臨時の借り切り列車が仕立てられるほどである

鉄道の駅からこの聖地・教会のある所まで1kmほどある。この行路際や聖地・教会の付近には参拝客目当ての土産物屋などが多く並んでいる。そればかりか、この地にあるホテルの数は、パリに次いで多いといわれる。

さらに街の近くには、ピック・ドゥ・ジュール (Pic du Jer) という高さ1000mぐらいの山があり、ケーブルカーで上がれるようになっている。その麓駅には市内バスで行くことができる。山上からは、スペインとの国境、ピレネー山脈を遠望できる。ツーリズム上でも魅力ある所になっている。

3. カルカソンヌ

カルカソンヌは、トゥールーズの東、普通列車で約60分、TGVで約40分の所にある。城郭都市として、現存するものではヨーロッパで最大といわれる。駅から城郭部分まで約1.5kmある。駅から路線バスがあるが、回数が少ないので、歩くことが望ましい。

カルカソンヌ城郭でまず注目されることは、城壁が二重にできており、その城壁の中に一般の民家や商店があることである。城郭都市といわれるゆえんである。城郭全体はシテ (cité) といわれるが、それはかなり広く大きく、丘の上に屹立している。ヨーロッパ随一といわれるのにふさわしい。

二重の城壁の間にはシテを一周する観光用馬車があるほか、シテ内部には本来の城郭部分としてコムタル城 (Château Comtal) があり、有料ガイド付きで見学できる。中世ヨーロッパの城とは、本来、どのようなものであったかを良く知ることができる。内側城壁上からはシテ城郭内の民家の模様も見ることができる。実に興味深い。

4. アルビ

アルビは、トゥールーズの北方、普通列車で約1時間の所にある、小さな街である。有名な画家、ロートレックの出身地で、その記念館があるだけでなく、大きな見上げるばかりの大聖堂、セント・セシル大聖堂 (Basilique Sainte Cécile) がある。

これは1282年に建設が始まった古いもので、内陣には「最後の審判」と題して、日本の地獄絵図に実によく似た絵が克明に描かれている。

こうした“最後の審判”というテーマは、ローマ、バチカンにあるミケランジェロの大作「最後の審判」と同じで、ミケランジェロの絵も、側面に“地獄に落ちる人”と“地獄から拾い上げられる人”が描かれている。ただし、セント・スシル大聖堂の絵のように地獄のあり様を描いた絵図という内容はない。

トゥールーズおよび近郊は以上とし、次に南フランスの中心都市、マルセイユ（および近郊）に行く。トゥールーズからマルセイユまでTGVでも約4時間である。

V. マルセイユと近郊

1. マルセイユ

マルセイユは何よりも、地中海に面した港町である。ちなみに、航空機旅行が一般的ではなかった往時には、日本からヨーロッパへ行くには列車便（シベリヤ鉄道経由）か船便しかなかったが、船便の場合は、まずマルセイユに着いて、そこから各地に行くというのが通例的方法であった。その意味でもマルセイユは多くの日本人にとってなじみのある、思い出深い所である。

フランス国内からマルセイユに列車で来る場合、例えばパリ（リヨン駅）からでもトゥールーズからでも着く駅は、中央駅であるサン・シャルル（St. Charles）駅で、駅正面から出ると、駅前通りに降りる所に、実に巨大な階段があることにびっくりさせられる。このように長い、かつ広い階段のある駅は、他にはまずない（もっとも現在は横にある屋内エスカレーターで登り降りできるようになっている）。

この階段を降りた所にある通りをそのまま300mほど行くと、マルセイユの中心通りであるカヌビエール通り（La Canebière）と交差する。カヌビエール通りを右方（海の方）に500mほど行くと、船着き場、ベルジュ埠頭（Quai des Belges）に着く（マルセイユには地下鉄があり、サン・シャルル駅から地下鉄で行くこともできる）。ここは本来のマルセイユ埠頭であるが、現在は旧港埠頭という位置づけで、いわば観光用埠頭である（本来の新港埠頭は外洋に近い岬の北側にある）。

このベルジュ埠頭からは、例えば沖合にあるイフ島に行く船が出ている。イフ島は、アレクサンドル・デュマの有名な小説『モンテ・クリスト伯』の主人公、エドモン・ダンテスが投獄されていたとされる牢獄のあった島である。

イフ島には、確かに堅固な石造りの牢獄が1540年から1914年まで実際に存在していた。しかし現在は、その施設には牢獄機能はなく、当時のままの旧牢獄遺跡として“シャトー・ディフ”（Le Château d'If）とよばれ、見学できるものになっている。今日でもその施設は見るからに威厳のあるもので、島の丘の上に傲然と建っている。

見学していて多少びっくりさせられることは、その中には「こ

の独房はエドモン・ダンテスが投獄させられていたとされる所である」（Cachot dit d'Edmond Dantés : Comte de Monte-Cristo）という表札のある個所があることである。確かに原作の通りと思いつつ、他方、訪問・見学客の休憩室に行くと、原作の『モンテ・クリスト伯』のあらすじを描いた映画が上映され、それが作品上のものであることが示されている。

もとより実際に収監されていた実例の跡もある。例えば、1871年のパリ・コムン蜂起（コムン政府としては1871年3月28日に成立、同年5月28日崩壊）の際捕らえられたリーダーの一人、G. グレミュー（G. Grémeux）が、同年11月30日銃殺されるまで居たという表示板のある独房跡などがある。

ところで、このイフ島に行く船は、同島の隣にあるフリウル（Frioul）島にも寄港し、マルセイユに帰る。フリウル島は全く通常の人たちが生活し、本格的な港湾施設があって、島内を一周する観光用のミニトレインまである観光志向の島である。イフ島と併せて見事な観光コースになっている。もとより両島は充分見渡せる距離にある。往時イフ島牢獄に捕らえられていた人たちはどのような思いであったか。複雑な思いを覚える。

ベルジュ埠頭に戻ると、近くの住宅が連なっているかなり高い丘の上に、マルセイユの守り神として名高いノートルダム・ド・ラ・ギャルド聖堂（Basilique de Notre-Dame-de-la-Garde）がある。その尖塔の頂には金色のマリア像がある。聖堂近くの展望台からマルセイユ（旧港）を中心に一望できる。しばし見惚れるばかりである。この聖堂までは、ベルジュ埠頭からトレイン型観光バスが出ている。

市の中心部に戻って、カヌビエール通りを内陸部に向けて、つまり概ね東方に向けて行くとロンシャン宮（Palais Longchamp : 地下鉄では同名の駅で下車）がある。ここは1860年代ナポレオン三世の滞在用に作られたもので、マルセイユの有力なツーリズム・ポイントの1つである。

マルセイユは以上とし、次に、マルセイユ近郊のアヴィニオンとアルルなどを訪れる。

2. アヴィニオン

アヴィニオンはローヌ（Rhône）川沿岸の都市であるが、既述のように、中世の一時期カトリック教皇庁のあったことで知られる。鉄道の場合、アヴィニオンでは、例外的に、在来線の駅、“アヴィニオン・センター（Avignon Centre）駅”と“アヴィニオン TGV 駅”が別になっており、両駅間ではシャトルバスが運行されている。マルセイユからは在来線でセンター駅まで約1時間、TGVではTGV駅まで約30分である。

在来線のセンター駅に着くと、否が応でも目に着くものに、駅前に連なっている立派な城壁がある。そして市の中心部に行く通り（Cours J. Joures）の所では、それが門のようにになっている。事実これはレピュブリク門（Porte de République）といわれる。この門を通して（北方に）600mほど行くと、まず左側に、時計

台のある市役所広場 (Place de l'Horloge) がある。

そしてその奥右側に(旧) 教皇庁建物 (Palais des Papes) があって、その前にやや広い広場がある。この(旧) 教皇庁建物は大きく堂々たるもので、内部は見学できる。前の広場では芸人たちが盛んに路上パフォーマンスをしている。ここに集まるツーリストの多い証拠であるが、この点でも有名な所である。

この(旧) 教皇庁前広場をさらに北方に少し行くとローヌ川がある。そこに有名な(川の途中までしかない) 橋、通称アヴィニオン橋、正式にはサン・ベネゼ橋 (Le Port St.-Bénézet) があり、その橋の中間の御堂にはサン・ニコラ礼拝堂 (La Chapelle Saint-Nicholas) がある。ちなみにこの橋は、もともとすでに12世紀にでき、川全体に架かっていたものであるが、洪水で流されたり、戦火で破壊されたりしたことが多く、17世紀に現在のような途中までのものにされたといわれる。

次に、マルセイユにやや近いアルルやニームなどに行く。

3. アルル、ニームと近辺

アルルは、マルセイユから在来線普通列車で約1時間、ローヌ川沿いの街である。古代ローマ時代の遺跡が多くあり、かつ、“炎の人”といわれた画家ゴッホ (もともとオランダ生まれで、生年1853-1890) が滞在したゆかりの地としても知られている。

ゴッホは、自分の耳を切り落としたいわゆる“耳切り事件”(1888年) などがあった後、1890年7月27日銃で自殺している。その作品は、どちらかといえば、没後高く評価されたものばかりであるが、アルルについては「アルルの女」、「アルルの跳ね橋」、「夜のカフェテラス」、「アルルの病院の庭」などの名画を残している。

このうち本稿筆者として強い感銘をうけたのは、「夜のカフェテラス」で描かれている、フォーラム広場 (Place du Forum) にあるカフェが、(現在の名称は)「Café van Gogh」として、黄色のテントのまま、ゴッホの絵の通りの形で残り、営業していることである。ゴッホが今もそこにいるかのような思いがする。さらに近くにはゴッホが入院していた病院が「Espase van Gogh」として残っており、見学できる(本稿筆者は訪れていないが、「アルルの跳ね橋」も復元されているといわれる)。

ツーリズム・ポイントとしては、既述のように、何よりも古代ローマ時代の遺跡が多く残されていることが注目される。アルル駅から見て行くと、例えば近くにまず、カヴァルリ (Cavaleris) の門がある。続いて、ローマ時代のコロッセオ (現在名は“Les Arènes”) があり、その横奥には古代劇場 (Théâtre Antique) がある。さらに近くの一角にサン・トロフィーム教会 (Église St-Trophime) があって、その地下を見学できるが、その広さと威容には驚かされる。その横を少し北方に行くと、ローヌ川堤防沿いの所には、ローマ時代の浴場跡、コンスタンティン共同浴場跡 (Palais Constantin) があり、近くのローヌ川堤には散策用の小路も作られている。アルルが古代ローマ時代において要衝であったことが遺憾なく示されている

もっともこうした古代ローマ時代の遺跡は、アルル近くの他の所でもいくつかある。その代表的なものは、既述で一言した、アヴィニオンとニームとの間にある、ローマ時代に作られた、巨大な水道橋、ポン・デュ・ガールである。これはガイドブックによく写真が載っているが、アヴィニオンまたはニームから見学バスが出ている。

ニームには、駅前的大通りを500mほど行くと(アルルのものと同様な)コロッセオがある。ニームは、この地域では、最も古い古代ローマ時代からの都市といわれるが、ニームからアルルにかけてこの地帯は、古代ローマ時代にすでにかなり栄えた所であったばかりか、アヴィニオンにおける「ローマ教皇の捕囚」事件などからみると、中世でも相当に実力のあった地域と推測される。フランスという国の古さ、その豊かな歴史を改めて感じる。

次には、この地域の現代的な豊かさを求めてニースおよび隣国のモナコ (Monaco) を訪れる。ニースには、パリから行く場合、出発駅はリヨン駅である。ニースまでTGVで約6時間。マルセイユからは在来線列車で約3時間である。

VI. ニース

ニースは、最高級のリゾート地として世界的に知られた所であるが、ニース中央駅 (Nice Ville 駅) 近くのメインストリート、ジャン・メツサン (Jean Médecin) 通りなどをみると、かなり庶民的な装いを感じられるし、ホテルでも結構一般的なものがある。このジャン・メツサン通りを真っ直ぐ500mほど南方に行くとマセナ (Masséna) 広場があり、そのすぐ先に有名なニースの海岸浜辺がある。ここでは、さすがにニース、海岸沿いに多くの高級ホテルのあることが眺望できる。

ただしこの浜辺は、白砂青松というものではなく、小石ばかりの浜辺である。しかしやはり、ここがニースの海浜かという思いは避けられない。この浜辺の堤防に当たる所には立派なコンクリート製の道路、“プロムナード・デ・ザングレ” (Promenade des Anglais: 直訳的には「イギリス人の散歩道」) ができており、そこから、例えばニースの旧市街 (Vieux Nice) および旧城址 (Château: 1706年取り壊された跡) に行くトレイン型遊覧バスが出ている。旧市街は道幅も狭く、古いフランスの街を垣間見ることができる。

中央駅付近に戻り、鉄道線路すぐ横の道路を東方 (モナコ方向) に500mほど行くと、国立マルク・シャガール美術館 (Musée National Marc Chagall) がある。晩年この近くに住んでいたシャガールが、自ら設立計画に参画したもので、シャガール・ファンの人には避けられない所である。

その近くにはバス停留所があり、そのバスで丘の上の終点的な所まで行けるが、そこには古代ローマ時代の遺跡公園があり、その一画にマチス美術館 (Musée Matisse) がある。海岸沿いの旧市街や城、古代ローマ時代の遺跡公園、シャガール、マチスの美術館などからいっても、ニースが単なるリゾート地ではないことがわかる。

ところで、このニースを中心にしたコート・ダジュール (Côte d'Azur) 海岸を走る鉄道路線は回数が多く、ニースから東隣りのモナコへも行き易い。ニース～モナコ間は普通列車で約 30 分弱である。次に、モナコを訪れる。

Ⅶ. モナコ

モナコは、言葉や通貨などがフランスと同じで、フランスからの出入も全く自由で、別の国という感じは全くないが、周知のように、同国は“モナコ公国 (Principauté de Monaco)”というれっきとした立憲君主制の独立国で、フランス領ではない。

ちなみにモナコ (国) は、行政区域的には 4 つの地域に大別される。モナコ・ヴィル (Monaco-Ville) 地区、モンテ・カルロ (Monte-Carlo) 地区、ラ・コンダミーヌ (La Condamine) 地区、フォンヴェイユ (Fonvieille) 地区である。

従って、例えば (モナコと同様に使われることの多い) “モンテ・カルロ”という名称は、正しくは、モナコ (国) 内の一地区をいうものである。ところが、モナコ中央駅は、正式には、“モナコ=モンテ・カルロ駅”という名称になっている。このことを考慮しながら、モナコ (国) 全体を地理的にみると、2 つの部分に大別される。

海に突き出ている、やや小高い岬 (半島) 部分 (モナコ・ヴィル地区) 並びにそれに付属した部分 (フォンヴェイユ地区) と、それと相対するような本土部分 (モンテ・カルロ地区およびラ・コンダミーヌ地区) とである。故に総称的には要するに、前者の岬部分が“モナコ地区”といわれるのに対し、後者の本土部分が“モンテ・カルロ地区”といわれるものと解される。

そこで改めて、“モナコ=モンテ・カルロ駅”から、まず、海の方にみえる岬の方に道なりに上がって行くと、モナコ王宮の前に行けるが、王宮の門前には展望台があって、そこからモナコ港の埠頭とモンテ・カルロの市街地部分を展望できる。その眺望は、絶品とあっていい。モンテ・カルロの港湾から背後の山の裾野にかけて展開されている実に素晴らしい都市風景が展望できる。このような美しい風景は、他にあまり例がない。多くの人がしばしば見惚れている。

周知のように、ヨーロッパには、イタリア、ナポリの湾岸風景の美しさを讃えた、有名な惹句『ナポリを見てから、死ぬ』(see Naples and then die) という言葉がある。実際にはそれが妥当するとされる個所はナポリ以外にもいくつかあるが、本稿筆者のみるところ、モナコ王宮前のこの風景もその 1 つになるかと思われる。

ところで、この王宮のことは、1956 年、アメリカ、ハリウッドを代表する美人女優、グレース・パトリシア・ケリー (生年: 1929-1982) が王妃として見染められ輿入れしたことで世界的に有名になったが、併設されている宮殿博物館 (Musée des Souveniries Napoléoniens et des Archives Historique du Palais) などは見学できる。

他方、山の斜面に展開されている (ここでいわれる) モンテ・

カルロ部分の中心は、なんとといっても、カジノの殿堂といってもいい“グラン・カジノ (Grand Casino)”である。ここは、(ハリ、オペラ座の設計者として有名な) ガルニエの設計のものといわれるが、その 3 階建てのシックな本館は、まさに御殿とあっていい。その建物玄関前に伸びている、モナコとしては格別に広い堂々たる通りと一体のものであって、まさに王宮というべきものである。

もともとこのカジノ本館は、本来は、高級社交場というべきものといわれ、品位が高く、内部の見学は自由にはできない。ただし、本館の横の所には別館的なものがある。そこではアメリカ、ラスベガスにあるようなスロットマシンなどが揃っており、トランプゲームもできるようになっている。ゲーム本来の場はここであるようになっている。

モナコは以上とし、近くのイタリアとの国境を越えてミラノに行く。列車で国境を越えると、(少なくとも晴天の日には) 列車から見える民家の風景、雰囲気がかなり変わる。それは、イタリア領に入ると、沿線の家々で洗濯物を公然と屋外に干している様子が目に付くことである。これは、フランス領内等ではほとんど見かけなかったものである。

こうした屋外での洗濯物干しは、例えばイタリア、ナポリ等ではかなり顕著に見られる。ナポリ市内等では、(ナポリ湾岸風景の美しさと並んで) 道路上で向かい合った建物 (ビル) の住人同士が道路上にロープを張り、それに洗濯物を干すことで有名である。もとよりこうした公然たる洗濯物干しは、いうまでもなく、日本も同様である。というよりは、イタリアでは日本のように布団まで屋外で干すことは、まずない。日本の方が徹底しているといえ、徹底している。

こうした生活文化の違いはどのようにして生まれるものか、という思いを持ちつつミラノを訪れる。ただしここでは、さしあたり問題意識として提示するだけのものである。

ニース、モナコからミラノまで直通の在来線急行列車で約 5 時間である。

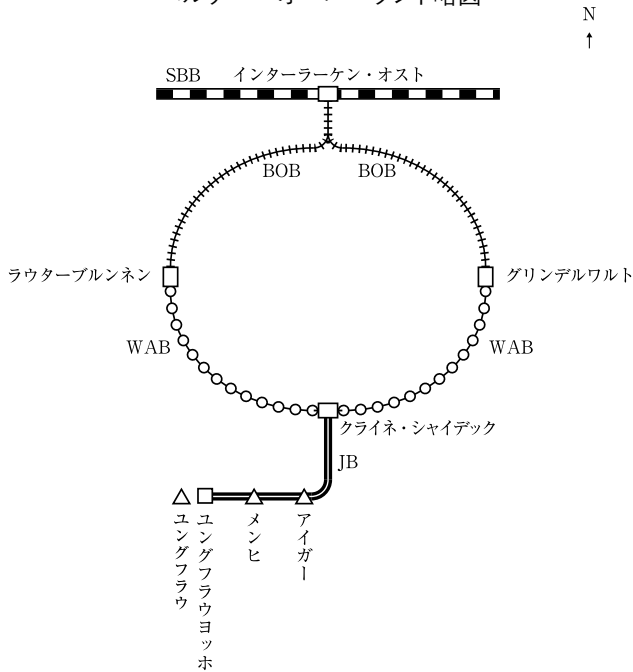
Ⅷ. ミラノ

ミラノでまず目を見張らせるものに、中央駅 (Stazione Centrale) の建物がある。1931 年に完成したもので、それほど大きいものではないが、大理石でできた堂々たるもので、すぐ近くのアルプスを背景に威容を誇る。ヨーロッパの代表的駅舎といわれる。

ミラノにはツーリズム・ポイントとなる所は多いが、多くの人がまず訪れるのは、なんとといっても、市の中心部にあるゴシック建築の大作、ドゥオモ (Duomo) である。本堂の建物には 135 本の尖塔があり、2245 人の聖人像の彫刻がある。イタリア最大のゴシック建築物といわれる。

びっくりさせられるのは、本堂横にエレベーターがあり、その終点まで乗ると、本堂の屋根部分まで上がれて、屋根の上を歩くことができることである。その下の本堂では人々が熱心にお祈りをしている屋根の上を土足で歩くのである。このようなこ

ベルナー・オーバーラント略図



クライネ・シャイデックは、アイガー山の北端の麓にあるところの、ホテルなどもある、峠的な小さな平地である。ここで、ユングフラウ・ヨッホまで行く登山電車、“ユングフラウ鉄道” (JungfrauBahn, 略号: JB, 線路幅: 1000mm) の路線に乗り換える。この路線は 1912 年に完成したもので、全長約 7km。ほとんどがアイガー・メンヒ・ユングフラウの山腹の地下の中をトンネル式に進む。終点駅のユングフラウ・ヨッホ駅も地下の中にある。そこから 100m ほどトンネルの中の歩道を行くと、エレベーターがあり、スフィンクスとよばれる展望台 (Sphinx Terrassen) に出る。

そこからユングフラウの 4000m 級の高山の様子を遺憾なくみることができる。西ヨーロッパで最も巨大で長いといわれるアレッチ氷河 (Aletschgletscher: 世界遺産) が目の前にある。その様子には息を呑む。これがアルプスかと驚嘆する。地下にある電車終点駅の近くにレストランがあることにも驚かされる。

ベルナー・オーバーラントには、以上のほか、多くの山岳ツーリズム・ルートがあるが、本稿では省略している。

X. あとがき

本稿で主たる対象としたフランスなど西ヨーロッパ諸国では、英国を含めて、海水を浴びること、すなわち海水浴が健康に良いということが長く信じられ、特に夏季には海水浴に行く人が多くあった。この海水浴の適地とされてきたのが、地中海沿岸地帯で、西はスペイン海岸から、東はイタリア海岸地帯まで、デスティネーションとして大いにもはやされた。

この地帯は、なかんずく、イギリス人には人気が高く、その程度は、既述のように、ニース海岸が“プロムナード・デ・ザングレ”という名称として今日でも残っているところにみられる。近年では、英国からグループで借り切りの飛行機やバスなどで

来て、滞在中に集団行為的に本国風を押し付けるようなものがあり、バナル・ツーリズム (banal tourism) として非難されるようなことがないではなかったが (この点について詳しくは大橋, 2011)、ともあれ、イギリス人に限らず、こうした海浜デスティネーションとして人気が高かったのが、マルセイユからモナコまでのコート・ダジュールといわれる沿岸地帯であった。

バナル・ツーリズムの傾向は、今日ではかなり低いものになっているが、コート・ダジュールの人気の高きことには変わりがない。それ以外においても本稿で取り上げた諸地域や諸都市について、ツーリズム上の魅力と特色を多少とも伝えることができたとすれば、本稿の任は果たされたものとする。

なお、上記本文中で触れた洗濯物の公然たる屋外干しについていえば、それは、乾燥機能付き洗濯機が広く普及すれば、自然になくなるものであろう。それはいずれの日にか必ず来る。しかしそれが、人間生活にとって真に素晴らしいことかどうかは、議論のあるところであろう。というのはそれは、特権的上層階層における (ペレンが唱えて有名な、“見せびらかしの消費” (conspicuous consumption) と表裏一体の) いわゆる“隠す文化”の進展に相当するからである。

例えばゲーテが「君よ知るや南の国」で謳ったイタリアの (北の国から見た) 素晴らしさは弱まるのではないかと思う。少なくともアメリカのパットナム (Putnam, 2000; 大橋, 2010) らが力説している (人間同士の社会的絆の程度を意味する) 社会資本 (social capital) の程度は減退するように思われる。ちなみにその場合でも、日本では布団干しは続くのであろうか。興味のもたれるところである。

いずれにしろ、国境とは、単に領土の違いをいうだけのものではなく、文化の違いをいうものであることを思い知らされる。

(参考文献)

- Putnam, R.D. (2000), *Bowling alone: The collapse and revival of American community*, New York: Simon and Schuster. (柴内康文訳『孤独なボウリングー米国内コミュニティの崩壊と再生』柏書房)
- Veblen, T.B. (1899), *The theory of leisure class: An economic study in the evolution of institutions*, New York. (小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波文庫)
- ウイキペディア・自由百科事典、「フランス」、「ツール」、「ボルドー」、「トゥールーズ」、「ルールド」、「カルカソンス」、「マルセイユ」、「シャトー・ディフ」、「アヴィニョン」、「アルル」、「ニース」、「モナコ」、「ミラノ」、「ベルナー・オーバーラント」、「ユングフラウ」等。2023年8月1日閲覧。
- 大橋昭一 (2010) 「観光と社会関係資本 (ソーシャル・キャピタル)」『観光の思想と理論』(文真堂) 第7章 (131-152頁)
- (2011) 「現代マストツーリズムの特性についての一考察—バナル・マストツーリズム論の展開—」『関西大学・商学論集』56巻2号、69-93頁
- (2024) 「パリ、モン・サン・ミッシェル、シャモニ=モン・ブラン—フランス中央領域・ツーリズム・ノート—」『和歌山大学・観光学』30号 (観光フォーラム)、109-114頁

受理日 2024年6月25日